

## 南三陸町の心理支援センター派遣を総括して

センター運営委員 小俣和義（青山学院大学）

東日本大震災直後の2011年5月より、自治医科大学医学部同窓会プロジェクトに加わるかたちで、宮城県南三陸町への心理支援活動をさせていただくこととなりました。日本全国からのご応募があり、センター派遣として独立した同年9月以降も毎週2～3名がリレー形式で派遣する体制をとっておりました。その後、2012年12月までの約1年半にわたり全66陣が活動を継続できたのは、本プロジェクトに参加された皆様の高い志と被災地への強い思いがあったからこそだと思います。

当初被害が甚大であった南三陸町では、チームとしての方針を一貫しておらず、現場での意思決定が不明確であること、さらに地元の関係機関との連携が不十分であることなどの課題が浮き彫りとなり、センター派遣心理士チームとしての支援活動が難航しておりました。この時期に、登米市内の避難所でのボランティア活動を通して、被災された方々から、人との触れ合いや思いやりの大切さを教わりました。また、被災時のショックや孤立してしまうことへの不安についてもお話を伺い、チームとして何をすべきか少しずつ方向性が見えてきました。そして、被災者同士が顔を合わせてお互いが元気になれるような交流の場を望む声を受けて、南三陸町の仮設住宅に拠点を移すにあたって、カフェ・あづまーれを基盤とした心理支援活動を展開することとなりました。地元の社会福祉協議会にカフェ運営の主体を担っていただきながら、2か所の仮設住宅での活動を中心に支援を継続して参りました。生活支援員の皆様にご協力いただいたおかげで、派遣心理士は心理的なサポートに重点を置いた支援活動ができるようになりました。地元の医療機関や町役場、そして仮設住宅に住む方々からも、支援活動を進めていくにあたって多くの貴重なご示唆を戴きました。派遣心理士ができることは限られており、地元の皆様が必要とすることを十分に受けとめきれずに、行き届かない点多々ありました。それでもなお、地元関係機関や住民の方々には派遣心理士に理解を示し温かく受け入れてくださいましたことに厚く御礼申し上げます。さらに、多くの企業や団体、個人の皆様より、ご寄附や物品提供などのたくさんのご厚意が寄せられましたことにも感謝いたします。

今回、センター派遣心理士チームとしましては、報告会やweb掲示板を通じて情報共有や申し送りを徹底し、コーディネーターや相談役をはじめとする後方支援体制を作り、地元の関係機関との連絡を密に行うことをこころがけました。災害支援を行う際には、相手の話に丁寧に耳を傾け、地元のニーズを真摯に受け止めつつ、臨機応変に対応していくことが重要であると考えて活動して参りました。今回の経験を通じて、支援する側の都合を押し付けることなく謙虚にかつ柔軟に対応すること、支援チームという組織としてのまとまりをしっかりと保ち覚悟をもって臨むことがとても大切であると実感しております。地元の関係機関の方々と共同で、東日本大震災心理支援センター『南三陸町心理支援報告書』を昨年末に発刊いたしましたので、ぜひご高覧いただけますと幸いです。

最後に、宮城県臨床心理士会の支援チームの先生方には、今年の7月に南三陸心理支援活動の主体を引き継いでくださり、地元の関係機関とも良い連携を作りながら、丁寧にかつ息長く支援を続けていただき、とても心強く感じております。現在も震災の爪痕が色濃

く残る被災地において、カフェを中心とした支援のほかに、仮設住宅の“巡回お茶っ子会”や母子支援、学習支援へとその活動の展開を広げていただき、ありがとうございます。今後も、センターと地元県士会チーム、そして地元関係機関とで密に連携をとりながら被災地の復興に向けての支援を精一杯進めて参りたいと存じますので、どうぞよろしくお願ひします。